

化を求める男子学生の自殺など）を典拠とした。こうして解放的であるはずの民衆事件、民衆物語はいつしか男性化される。

こうした「物語の男性化」現象は、在日朝鮮人女性たちの渡航歴に対して「強制連行」言説が抑圧的な影響を及ぼす例にも見ることが出来る。こうして在日朝鮮人女性たちの民族差別と性差別という二重の抑圧の歴史が隠蔽されるとソニア・リヤンは指摘する。これは鄭暎恵が描いたように、被差別者の中にも存在する男女間の権力関係を描くことが「反動的」と評される現実と同じだ。権力への抵抗言説であるはずのアイデンティティの政治が、もう一つの権力作用を生み出し、女性を排除してしまうのだ。

第一世代の民衆神学が植民地主義的権力構造や普遍主義を告発しつつもジェンダーバイアスを克服できなかったように、すべての伝承や記憶、それらに対するものがたりや証言にも同様の限界がある。必要なのは「普遍的」で「客観的」で「純粹」な語りという幻からの解放だ。「アジアの女性神学」（チョン・ヒョンギョン）が提唱したように、重要なのは教義的な「純粹性」ではなく実践であり、「生き残りと解放のための混淆主義」だ。

日本国籍、男性、大人、異性愛者、正規雇用労働者という同質性を基準としたマジョリティ的環境において、マジョリティ的男性の語りは「普遍的」な語りとして聞かれるが「男性の声」と認識される場面は多くない。民衆神学は「民衆」を中心としたアングルを提案し、フェミニスト神学は父権制的価値観に潤色されたキリスト教の脱構築を提案したが、これらは自

らの「立ち位置」を明示した上で神学を語りなおす作業だといえる。「ジェンダー宗教学」という提案は、語られる宗教と語り手との間の権力関係を暴露し、同時にそれらの克服を目指している。もちろんジェンダーだけにアイデンティティを単純化することは別の本質主義を招来する危険性があるが、だからといって、自らの属性を透明化した「わたし」によるアトム的語りを推奨はしない。なぜなら「立ち位置の明示」は、他者との連帯のための必要不可欠な行為であり、沈黙というマジョリティ的権力の行使や、謙遜を装う自らの当事者性の隠蔽と責任放棄を拒否するための重要な構えだからだ。

「ジェンダー宗教学」の探求は、差異や多様性を「裁き」（創世記十一章）ではなく「祝福」（使徒言行録二章）と受け止める伝統に立脚する。状況的で多様であることは自由で開かれていることの証だからだ。

はざまの位置で

——アジア系アメリカ人フェミニスト神学の試み——

黒木雅子

ジェンダー宗教学の目標は、白人エリート男性を前提とする枠組みに女性や他のマイノリティを追加するだけではなく、排除されたり周辺に置かれている人たちの宗教実践や主体の分析に、アカウンタブルな枠組みを探ることである。言うまでもな

パネル

くその方法は一つではなく、今回の発表はその一つの試みである。本発表で、「*in-between space, interstice*」という概念を用いるのは、固定的な境界を想定した二項対立的枠組みに引き裂かれる、アジア系アメリカ人キリスト教女性という複合的マイノリティの宗教的主体を可視化するためである。

一九六〇年代末に誕生したアジア系アメリカ人という汎エスニシティは、異質性、雑種性、複数性を含む歴史的流層のカテゴリーである。中国系、フィリピン系、インド系、韓国系、ベトナム系など、出自、言語、階級、歴史、文化、宗教の上で多様性をもつ。さらに外婚による複数人種 (*mixed race*) のアジア系も増加している。この動きは、白人と黒人の二分法や人種の純粋性の神話、「はざま」性を明かにする。ではカテゴリー内の多様性を考えると、汎エスニシティは消える運命かという、そうではない。アジア系アメリカ人の人種の「はざま」性（「本当の」アメリカ人でもアジア人でもない）、反移民／反アジアの動き、「ガラスの天井」は、社会的、政治的、宗教的な連帯の必要を示している。たとえば流動的、可塑的、重層的なエスニック・アイデンティティをもちながら、状況に応じて汎エスニック・アイデンティティを使いわけている、サンフランシスコ周辺の日系および中国系のプロテスタント主流派教会のなかには、エスニック教会から汎エスニック教会へと対象を広げて生き延びようとする教会がある。第二次大戦で敵対する祖国を支持した日系と中国系のキリスト教会は、二世代を経て汎エスニック教会へと変容している。

六〇年代北米のフェミニスト神学は、従来の神学がいう「人

間」の経験が男性の経験であり、そこから女性が排除されることによって低い社会的地位の維持と補強がなされてきた、と論じた。ところが、その「女性」の経験そのものに潜む本質主義が構築主義によって、また単一の「女性」の経験という前提がエスニックおよび性的マイノリティの女性によって批判されたのである。それ以降、ジェンダー階層秩序は、人種・民族、階級、セクシュアリティ、宗教など他の階層秩序と連動して捉えられている。さらに、近代的ヒューマニズムのもとで、男性と女性、白人と非白人、ヒロインと被害者などの対立カテゴリーを反転し後者を高めようとした初期のフェミニスト神学や「解放の神学」の問題が指摘された。それは、カテゴリー内の異質性の抑圧と、文化的純粋性によってもたらされる閉じたアイデンティティである。そこで純粋性を生み出す権力構造を問い直し、主体を関係性の中で位置づけるのが、ポストコロニアル批判である。聖書のポストコロニアル解釈は、植民者の関心を正当化する解釈を問い直すだけでなく、コロニアルと見られる方法を脱植民地化の道具として流用する。オリエンタリストやネイティブリストと違い、ポストコロニアル聖書解釈はテクストの唯一の意味を取り戻すのではなく、過去と交渉する。今日キリスト教の聖書は、西洋だけに属するのではなく、「第三世界」あるいは「三分の二世界」の人々が手にしており、ユダヤ教とだけではなく、他のテクストと共存するところに、ポストコロニアル時代の意味があると言える。アジア系アメリカ人のポストコロニアル・フェミニスト神学者は、アジアの文脈に聖書を位置づけ、家父長制と植民地主義によって生み出された純粋な

アイデンティティから、複合性、関係性、流動性に注目して主体の再構築と再交渉を読み取るうとしている。

パネルの主旨とまとめ

黒 木 雅 子

本パネルで取り上げる「ジェンダー宗教学」は、社会の周縁に位置する女性の声に耳を傾けること、男性中心主義と西洋中心主義の解釈に疑義を呈する批判的な視点をもつこと、そして女性のみに限らず性的マイノリティなどの弱者の視点を重視することを目指し、宗教を包括的に論じようとするものである。

ジェンダーは単なる社会、文化的に形作られた性差という意味にとどまらず、現実の不公平や不均衡を顕在化し権力関係を示す視角である。宗教は「ジェンダー」を形作り、人間を超えた存在の名の下にそれを権威づけしてきた。「ジェンダー宗教学」は、世界宗教の家父長制的な性質を批判してきたフェミニズムの長い歴史に基づき、宗教が女性や少数者への不当な価値観や社会構造の形成に加担してきたことを明らかにすると同時に、そうしたフェミニズムのアプローチが西洋中心主義的啓蒙主義や植民地主義に関わっていたという問題点をも検証する。本来、性別や人種や性的指向などにとらわれない「普遍的」の教えを説くはずの仏教やキリスト教から排除されてきた人々に対して、宗教研究はどう向き合う事が出来るかを問うことに

なるだろう。

ヨーロッパで活躍する「宗教とジェンダー」研究者の一人 U・キングは、ジェンダーの視点を積極的に活用することなしには、「どのような宗教もはや正しく記述、分析、説明されない」と主張している (King, 2004)。もしジェンダーが社会の中の性差にまつわる非対称性をあきらかにするのであれば、人間の平等な尊厳と解放を目指す宗教という事象の研究にジェンダーの視点が欠落していることこそが、そもそも不適切である。宗教とは本来的に、暴力や抑圧を正当化するのではなく、社会的弱者の置かれた状況を是正し、すべての存在の自由と価値と尊厳を主張し、これらを実現するべきものである（『ジェンダーで学ぶ宗教学』田中・川橋編、世界思想社、二〇〇七年）。ジェンダーの視点を通して宗教、および宗教研究を見直すことは、宗教を伝統や後進性と、他方フェミニズムを近代や世俗性と結びつけるような二項対立的枠組みを問い直すことでもある。この作業を通じ、宗教的实践を見つめなおす機会を提供することにもなる。ジェンダーの問題は宗教の中に遍在している。それが複雑で多層的であるからこそ、多くの人によるさまざまな視点からの議論が求められている。ジェンダーは、これからの宗教研究にとって、ますます重要な視座となるだろう。

本パネルは、そうした問題提起のひとつとして、従来の宗教学では十分な議論を行ってこなかった宗教研究者の姿勢を問題にしつつ、日本、韓国、エジプト、アジア系アメリカ人という非西洋の女性たちを対象に、これまでの宗教研究に内在する偏